

ハイエク

『利潤、利子及び投資』

Hayek, F. A. v., Profits, Interest and Investment, 1939. vii+286p.

高橋 泰藏

一

ハイエクは前著「物價と生産」(一九三一年)を著はして以來特にケインズとの論争を通じてその理論の具體的内容について自ら再検討と新展開とを試みつゝあつたのであつて、この過程は断片的にはこれまで發表せられた數個の論文によつて知られるところであるが、更にそこから積極的に「物價と生産」に代はるべき如何なる理論構造が展開せられるかは一般に注目せられてゐたところであつた。本書の巻頭を占める「利潤、利子及び投資」なる論文はこのやうな期待に應へるものとして新たに書かれたものであつて、本書はこの論文と從來發表せられた七つの論文とから成るものであるが、この冒頭の論文はかなり積

極的にまた組織的にその最近の考方を展開してゐると見られる點で甚だ注目すべきものと言ひうるであらう。殊に一面ではケインズとの論争の影響を思はせる如き「不完全雇傭」の前提を採り入れて短期の動態過程を中心問題としてゐる點で、また他面では「資本構成」の觀念を中心とすることによつて前著に於けると同じ構造分析的な態度を一貫して示してゐる點で、極めて興味深いものがある。その意味でこゝではこの新たに書かれた論文がハイエク自身の考への發展の中で如何なる意味をもつかを中心として考へて見ることにする。

今述べたやうにこの論文について最も注目せらるべき點の一つは、先づそれが「不完全雇傭」の前提を採り入れることによつて短期的過程を中心課題とし、従つてこの點で前著の發展理論的性格から著しい變化を示してゐることである。この點についてはハイエク自身もその緒論で明かにしてゐるところであるが、この相異を具體的に示すものは、先づ出發點に於て前提せられる幾つかの事情であつて、これを要約すれば、(一)物的資源及び労働の大なる失業の存在すること、(二)主なる生産の集團間に於ける労働の移動性の制限せられてゐること、(三)既存の生産設備の特殊性、(四)貨幣貨銀の殆んど不變なること、(五)金利の不變なること等である。これらの諸前提は何れも短

期の經濟の内容をなすものであるが、殊にこのうち(一)の物的資源及び勞働の不完全雇傭の前提は「物價と生産」に於て特に完全雇傭の前提の強調せられたことと對照して、ハイエクの考方の根本的改變とケインズへの接近を思はしめる主たる點であらう。この他にもケインズの「一般理論」に使用せられてゐる諸概念、例へば後に述べるやうに「乗數」の概念が用ひられてゐることなど、「一般理論」の影響の認められるところが多いのであるが、しかしこのやうな變化は「物價と生産」に於て取扱はれなかつた短期の過程を對象とし、これによつて前者を補はんとすることに基くものであつて、そのためにより現實的な前提に出發せんとしたものと云ひうるであらう。言ひ換へれば、このやうな前提の改變は、短期理論への問題の移動によつて必然的に行はれたものであつて、ハイエク自身のかゝる見方は、そこでなほ前者に於ける「完全雇傭」の前提が論理的には正しい手續きであることを確信してゐることからも知られるところである(Dr. F. S.)。それはともかくケインズの「一般理論」の出現に逢つて、ハイエクが「物價と生産」に缺けてゐた短期理論の必要を認識したことは明かであるが、しかしこの新たな短期理論が如何にして長期理論と關聯しうるか、或は短期の動態現象が發展現象と如何なる關係を有つかが、この論文で明か

にせられてゐないことは甚だ憾みとしなければならぬ。このことはケインズについても同様に言ひうるところであつて、そこに最近に於ける短期理論が全動態理論の構造の中にもつべき地位の問題が残されてゐると同時に、一般に短期理論化への傾向に課せられた問題があると言ひうるであらう。

二

この論文での今一つのそして最も注目せらるべき點は、動態過程が「資本構成」の變化として見られてゐることである。それは「物價と生産」に於ては動態が「生産構造」の變化としてのみ捉へられてゐたことに對して、動態過程の分析について一つの新たな角度を示したものと云ひうるからである。尤も動態現象を「資本構成」の變化として見ることは必ずしも新しいことではないのであつて、それは資本蓄積過程を不變資本と可變資本との比率として捉へる考方にも見られるものであるが、従來一般に貨幣的動態理論家が資本蓄積論の成果に對する理解を缺いてゐたことに顧みて、この角度を取り上げたことは注目すべきことと言つてよいであらう。たゞハイエクはこれをリカードの消費財價格の騰貴(實質賃銀の下落)は機械その他の資本財の使用に對して勞働使用を相對的に増加せしめると言ふ立言

(「經濟學及び租税の原理」第一章第五節)からその著想を得てゐるのであつて、そのために彼はこれを「リカアド効果」(Ricardo Effect)と呼んでゐるのであるが(註 8)、それは上に述べた如き「資本構成」の問題に他ならない。たゞこの場合に於ける「資本構成」の變化は一般に發展の内容として考へられるそれとは反對の方向に於て行はれるのであるが、このことはそれが短期に於けるそれであることに基くものであつて、そこに一般には發展過程の問題として考へられて來た「資本構成」の問題の短期理論に採り入れられたことの意味が見られるわけである。

ハイエックの分析は好況の後期に於ける消費財價格の騰貴から始められるのであるが、この場合には實質賃銀の下落によつて「短期の投資」が選ばれて、そのために「資本構成」は機械其他の資本財の使用に對する勞働使用の相對的增加の方向をとると考へられる。その理由は實質賃銀の下落による利潤率の増大は短期的であり、これによつて生ずべき利潤を確保するためには企業家は資本を後に至つてその結果を生ずる如き資本財に投ずるよりは、直ちにその結果を生ずべき勞働雇傭に向ける方を選ぶからであつて、その結果「資本構成」は景氣の上昇と共に勞働の相對的使用を増加せしめるわけである。「資本構成」は

發展過程に於ては勞働使用の相對的減少を惹起すると考へられるのであつて、上の場合は正にこれを反對の方向をとるものと言はなくてはならない。(リカアドの「原理」第二版に新たに追加せられた第三十一章「機械論」では機械の勞働への代位の問題が取扱はれてゐる。)この相異はこれら二つの場合に於ける條件の異なることに基くと言ひうるのであつて、發展過程に於ける「資本構成」が勞働使用の相對的減少を示すと考へられるのは、機械と勞働との技術的結合關係に於ける前者の増大が起り、これによつて一定の資本額による生産の増加と利潤の増大とが齎らされると考へられるからであるが、これに反して技術的條件の不變なる短期に於ては「資本構成」の變化は二つの資本價值の相對的變化と言ふ經濟的條件の變化によつてのみ起りうるものであつて、その短期に於ける變化の仕方たる實質賃銀の下落に於ては利潤率の増加は勞働使用の相對的增加によつて齎らされるからである。(このことは言ひ換へれば機械使用の強化に他ならないのであつて、この點は現に實際上經營能率の比較の方法として固定資本額と賃銀支拂額との比率に於ける後者の相對的に大なることがその基準とせられてゐる事實と一致する點で甚だ興味があると言ひうる。)尤もこれら二つの場合に關する以上の如き對照は直接には行はれてゐないのであるが次

いで述べるやうな「資本構成」を反映すると考へられてゐる。「乗數」の決定せられる事情に對する説明から、以上のやうな對照が漠然とながら考へられてゐると見られるのであつて、從來一般には發展現象に關はらしめて考へられて來た「資本構成」の問題を短期理論に導入したことは、「資本構成」の考方そのものにとつても、また短期理論にとつても甚だ注目すべきことであらう。

三

以上のやうに「資本構成」の變化を動態の内容と考へることは、それ自體動態現象を構造的に見るものと言ひうるが、この立場は更にそれが前著の中心觀念であつた「生産構造」に結合せられてゐることから一層明かにせられるのであつて、この場合「生産構造」を代表するものとして考へられるものが「乗數」Multiplier である。

進歩した「資本家的」生産に於ては、最終需要に應ずる最終財（消費財）の生産のためには、これに數倍する資本財の生産が行はれるのであつて、この事實は「累加原則」Acceleration Principle と呼ばれてゐるのであるが、かゝる最終需要と資本財需要との關係を示すものが「乗數」に他ならない。（この「乗

數」に對して最終需要を「被乗數」Multiplier と呼ぶ。）從つてこのやうな「乗數」は「生産構造」を代表するものと言ひうるわけであるが、それは一般には經濟的要因よりも技術的要因によつて決定せられるものであつて、短期に於ては略ぼ一定の大きさをもつと見做されうるものである。それは全體としての最終需要と資本財需要との比としての「乗數」は、個々の生産より生ずる最終需要と資本財需要との比によつて決定せられる筈であり、この關係は即ち「資本構成」であり、それは一般には技術的條件によつて決定せられると考へられるからであつて、そこに「乗數」によつて代表せられる「生産構造」と「資本構成」との必然的な關係が見られるわけである。この關係は「生産構造」が「資本構成」を反映する關係と言ひうるのであつて、このことは通常一定であると考へられる「乗數」の短期に於て變化する場合にも見られる。即ち一般には最終需要の變化は一定の「乗數」を媒介として正比例的に資本財需要を變化せしめるわけであるが、上に述べた好況の後期に於ける消費財價格の騰貴せる如き場合には、短期投資の選ばれる結果勞働使用が増加し、最終需要が増加しても、「資本構成」が變化する結果として資本財需要は相對的に減少すると言ふ現象が起るのであつて、このことは言ひ換へれば「乗數」が小となり、「生産

「構造」が短縮化することに他ならないからである。このやうに「資本構成」は一般に「生産構造」に反映することが見られるのであつて、この關係の説明を媒介するものが「乗數」の概念であるわけである。この場合最終需要の増加にも拘らず資本財需要が相對的に減少することは一般に考へられるところとは反すると言ひうるが、同時にそこに短期的動態の特徴があると言ひうるのであつて、ハイエクは特にこの點を明かにすることがこの論文の一つの重要な目的であることをその緒論で述べてゐる (p. 3)。

こゝで附け加へて注意せらるべきことは、ハイエクがこの場合に於ける「乗數」がケインズの所謂「乗數」と混同せられないことを特に斷つてゐることである (p. 10)。それは上に述べたところからも明かであるやうに、この場合に於ける「乗數」は「資本構成」によつて決定せられ、「生産構造」を代表し、それを含むものとして考へられるものであるが、ケインズに於けるそれは最初の投資と總投資との間に存在すると考へられる單純な量的關係としてであつて、「乗數」そのものとしては「資本構成」も「生産構造」も反映するものではなく、またそれを基礎として考へられたものではないからである。變動の動因分析に終始するケインズの「一般理論」から構造分析への通路を

見出す上からも、上の如き「乗數」の理解の仕方は一つの暗示を含むものと言ふことが出来るであらう。

以上述べたところ以外に、この論文は「物價と生産」以後に於けるハイエクの思索の結果を示す幾つかの點が見られるのであつて、例へば從來自然利率率の中に混同せられてゐた収益率を率直に「利潤率」として認めてゐることや、「生産段階の圖式」が生産構造の單線的表現に止まつてゐたことを認めてゐることなどが擧げられるであらう。殊にこの前者は短期の動態に於ては「貨幣利率」が殆んど無視せられうる作用しかもたらさぬのに對して、全く支配的な作用をもつと考へられ、動因的には短期の全過程を通じて中心をなすと考へられるものであつて、この點はウィクセル以來の自然利率中心の考方から脱却せんとする試みとして注目に値する點であらう。

以上述べたやうに、この論文は「物價と生産」に對しては個々のには幾多の改變が試みられてゐるのであるが、それは全體として對象が短期の動態過程に移されたことに基くものであつて、この點からすればケインズの「一般理論」の影響は極めて大きいものがあると言はなくてはならないであらう。しかし對象そのものとしては短期の動態過程に移されながら、なほその根本的態度に於ては前著以來の構造分析的立場を一貫してゐること

が見られるのであつて、このことを示すものが上に述べた如き動態を「資本構成」の變化として見ようとする方法であると言ひうる。のみならずそれは前著に於ける「生産構造」的見方を一步掘り下げたものと見られる意味に於て、またそれが短期の動態と結合せられてゐる意味に於て特に注目し値するものがあると言ひうるであらう。しかしこゝに重ねて述べられるべきことは、このやうにして構成せられた短期的動態理論が發展の理論と如何に交渉するか、明かにせられてゐないことであり、またこの點に長期理論にとつても、また短期理論にとつても残された問題があると言ふことである。